

「南殿大広間について」

沖縄県立博物館・美術館

田名 真之

1. 創建 「天啓年間、尚豊王、この殿を建て、以て薩州使を款待するの所となす。  
且つ、佳節に遇うごとに、王、この殿に出でて、以て倭礼を行い群臣を召  
見す」（『琉球国旧記』） 天啓年間 1621～1627年

2. 年中行事 （『琉球国由来記』他）

正月元日 正殿、御庭等での諸儀式を済ませた後、王、南風御殿に出御、  
世子、王子、摂政、三司官にお酒を賜う

節句 上巳 端午 八朔 重陽

\*もと下庫理で行っていたが、尚貞王代（康熙10年）南殿に変更  
国王出御、倭礼で行う

3. 御状渡（4月）薩州への使者（年頭使他） 江戸への使者 国翰（御状）の授受

御状開（11月）薩州からの御状、江戸からの御状の受納

\*ともに南殿に国王出御 出仕官員 冠朝衣 三司官より使者へ御状授受  
献上の御酒、出仕官員「御流」頂戴、着座せざる人員「御通」賜う

\*中国への表文の使節への手交の儀の「上表渡」は下庫裏で行い  
中国からの勅書は「勅書迎」として、三司官等が通堂で迎え、国王が御  
庭で迎えた

- 康熙53年 江戸上り 4月27日 餞宴を賜う、与那城王子（正使）以下南風御殿  
にありて漢粧礼式及び漢戯、球戯もて聖覧に備えた（翁姓永山家7世盛寿）

- 乾隆13年 江戸上り 6月朔日、国翰を領するの時、南殿に於いて「大通」こ  
れを賜う…6日奏楽して王子に随い城に進み、南殿に於いて朝見するの時、中国  
礼を行う…。（翁姓伊舎堂家7世盛徹）

（その他）

- 康熙38年2月25日、国王、唐榮繁生を喜び宴を賜う（時に通事以上皆宴を賜う、  
正議大夫以上は御書院にありて国王陪す、中議大夫以下は南風御殿にありて御書  
院諸臣これを陪す）（蔡氏祝嶺家10世応瑞）

- 乾隆3年正月27日、南風之御殿において、山姥、杜若、実盛、芦刈、笠之段、  
羽衣等の曲を舞って、上覧に備える。是により恭しく大通を賞賜せらる。

（向氏辺土名家11世朝喜）

- 雍正元年、（雍正帝）の登極を慶賀し、康熙皇帝に進香の事のために、命を奉じて王舅紫金冠となり中華に赴く… 10月2日、御茶飯慶儀のこのために南風御殿に於いて餞宴を賜う…（翁氏伊舎堂家5世盛伝）

4. 薩摩在番奉行の招請（「御座飾帳」より）

着任時	－	初めて御招請	5月
（暑気御見舞	－		7月）
年頭御祝儀	－		正月
首途御招請	－		4月

\*臨時もあり ー 御婚礼祝儀として御奉行様御招請  
（「御書院并南風御殿御床飴」）

5. 天長節（「御書院日記」）

光緒3（明治10）年9月28日（新暦11月3日）

南殿の大広間の床の間に、天皇、皇后の写真を飾って、摂政、三司官以下諸役人、間切役人などまで、拝礼を行った（明治8年から開始）  
国王、体調不良により出御せず

6. 琉球処分前夜（松田『琉球処分』、「史料稿本」「尚泰侯実録」など）

明治8（1875）年7月14日、松田道之、南殿上段の間で、今帰仁王子、伊江王子、三司官の浦添、池城、富川親方に対し、で三条太政大臣の「御達書」朗読。清国との関係の断絶、明治年号の使用、藩政改革を命ず

同年9月1日 松田、前日の琉球側の「御達書」への回答書に対し、南殿大広間で、両王子、三司官以下審議に関わる150余名を前に悉く反論、「御達書」の遵奉を迫っていた。

少括

南殿2階の大広間は、平成の復元段階では、建物内部の資料が乏しく、外観復元に止まったが、今回の令和の復元では、新資料の発掘などにより新たな知見が得られたこともあって、大広間を再現、空間展示を行う運びとなった。

南殿大広間は王府の年中行事を始め、「御状渡」薩摩在番奉行の接待など様々な場面で用いられてきた。琉球処分時の松田道之の「御達書」伝達などもここで行われた。南殿大広間の復元は、歴史の現場の復元であり、往事の行事の再現はもとより新たな利活用の可能性を生み出す場となることを期待したい。